研究成果報告書 科学研究費助成事業

今和 元 年 6 月 1 9 日現在

機関番号: 62618

研究種目: 基盤研究(B)(一般)

研究期間: 2015~2018

課題番号: 15H03206

研究課題名(和文)移動表現による言語類型:実験的統一課題による通言語的研究

研究課題名(英文)Language typology based on motion event descriptions: A crosslinguistic experimental study.

研究代表者

松本 曜 (Matsumoto, Yo)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・理論・対照研究領域・教授

研究者番号:40245303

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 11,300,000円

研究成果の概要(和文): 言語による空間移動の表現には興味深い差異と共通性がある。今までの研究では移動の経路が表わされるのが主動詞かそれ以外かという観点から言語の分類が行われてきた。しかし、経路の表現位置は経路の種類によって異なる。本研究では、統一的な通言語的ビデオ実験によって、多様な経路について10の言語において調査を行った。その結果、最も主動詞で表現されやすいのはUP/DOWNであり、されにくいのはTO,FROM,ALONGであることが分かった。このように、経路には、主動詞で表現されやすいものからそうでないものまで、ゆるやかな序列がある。この発見に基づいて、言語の差異をより明確に示すことが出来るのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義 この研究では、人や物が移動するという基本的な事象を、諸言語がどのように表現するのかを比較研究したもの である。移動の経路を表現するのに動詞を使うかどうかを調べ、諸言語に見られる差異の背後に共通した原則が あることを示した。このような共通性は、人間が人間であるゆえに持つ様々な傾向を反映しているものと考えら れる。したがってこのような研究は広く人間理解につながるものである。

研究成果の概要(英文): Languages exhibit interesting commonalities and variation in the description of spatial motion. Previous studies have focused on whether Path of motion is expressed in the main verb or other elements. However, the coding of Path depnds on the types of Paths described. In this study various Path types are examined through a video-based production experiment conducted in 10 languages. The results show that, crosslinguisticallu, UP/DOWN are most likely to be expressed in the main verb, while TO, FROM, and ALONG are least likely expressed in that position. Thus different Paths can form a scale in terms of the likelihood of being expressed in the main verb position. This finding allows us to formulate differences found among languages in more accurate and intersting ways.

研究分野: 言語学

キーワード: 言語類型論 空間移動 移動経路 意味論 通言語的比較

様 式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19(共通)

1.研究開始当初の背景

諸言語における移動表現については、Talmy (1991)が類型を提案しており、それを発端として様々な言語についての研究が盛んに行われてきた。Talmyは、移動表現の中核にある意味要素は経路であるとし、その経路が文中のどの位置で表現されるかから言語が分類されるとした。研究代表者は、長く移動表現を研究の対象とし、特に最近では、日本ではあまり行われてこなかったビデオ実験を用いた研究に取り組んできた。これらのプロジェクトによって明らかになったことの一つは、同じ言語においても、経路の種類によって表現のパタンが大きく異なることであった。しかしながら、この研究には限界があった。実験的に調べた経路がTO、INTO、UPの三つのみであったため、この考え方がどこまで一般的なものか、深く検証するまでには至らなかった。したがって、より幅広い種類の経路についての研究の必要があった。

2.研究の目的

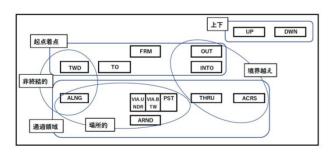
本研究の目的は、人間の言語が、人や物の移動をどのように表現するかについて、諸言語の 共通性と差異を統一的な課題を用いて明らかにするものである。具体的には、「ビデオ実験」の手 法を用いて、人や物が様々な経路を移動するシーンを15 の言語がどのように表現するかを調査する。 同じ言語でも、経路の種類によって異なる表現形式が用いられることに注目して、移動の言語 化に関するある仮説を検証し、それに基づいて、諸言語の移動表現における共通性と差異を見出 し、移動表現の類型に関する新たな提案を行う。さらに、言語表現の背後にある空間知覚や、他 の類型的特性との関連についても考察を行い、人間言語の共通性と変異の要因の解明に迫る。

3.研究の方法

移動表現の類型の鍵とされる経路の表現手段についてさらに研究を進める。具体的には、UP、DOWN、INTO、OUT、ACROSS、OVER、ALONG、TO, FROM などの多くの種類の移動経路を人が移動する場面に関して、諸言語の表現を体系的に比較するビデオ実験を行った。

4.研究成果

調査の結果、多くの言語において経路の種類によって表現パターンが異なり、さらにその変異に諸言語に共通した傾向があることが明らかになった。具体的には、主動詞でコード化されやすい経路からされにくいものまで、緩やかな序列があり、それが共通のスケールで捉えられることが示された。そのスケールは下図のものであり、右側に行くほど主動詞として表現されやすい。最も主動詞でコード化されやすいのは上下の方向を表す UP/DOWN であり、次がACROSS などの境界越えを含む経路である。一方、主動詞で表現されにくいのは TOWARD、ALONG であり、これらは非終結的な経路である。この調査を行わなかった言語においても、



この主張と一貫した傾向が見られることが分かった。この傾向は、知覚的に卓立性が高い経路が主動詞になりやすいことを示している。上記の発見に基づいて、経路の表現位置に基づくこれまでの類型は、このスケール上でどの範囲の経路を主動詞で表現するかという観点から再定義される。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計26件)

- Matsumoto, Yo. 2018. Motion event descriptions in Japanese from typological perspectives. Taro Kageyama and Prashant Pardeshi (eds.), *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*, 273-289.
 Berlin: Mouton de Gruyter. 10.1515/9781614514077-010. 查読有
- 2. <u>Kawachi, Kazuhiro</u>. 2018. Event integration patterns in Sidaama and Japanese. In Prashant Pardeshi, Taro Kageyama(eds.) *Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*, 313-342. De Gruyter Mouton. DOI: 10.1515. 查読有

- 3. <u>守田貴弘</u> 2017. 「『捉え方』の意味論―ダイクシスに関する日仏対照研究」 『フランス語 学の最前線』 6:31-67. 査読有
- 4. <u>吉成祐子</u>. 2017. 「言語使用の観点から見た移動表現の類型論:日本語・英語・イタリア語話者の主体/客体移動表現」西原哲雄,田中真一,早瀬尚子,小野隆啓(編)『現代言語理論の最前線』216-230. 開拓社.(ISBN: 9784758918244)査読有
- 5. <u>Matsumoto, Yo, Kimi Akita, Kiyoko Takahashi</u>. 2017. The functional nature of deictic verbs and the coding patterns of Deixis. Iraide Ibarretxe-Antunano (ed.) *Motion and Space across Languages: Theory and Applications*, 95-122. Amsterdam: John Benjamins. 10.1075/hcp.59.05mat. 查読有
- 6. <u>Takahashi, Kiyoko</u>. 2017. Mandarin Chinese and Thai expressions of caused motion: Different caused-motion components in verb-serializing languages. *Language and Linguistics in Oceania* 9: 43-69. 查読有
- 7. <u>松本曜</u>. 2017.「移動表現の性質とその類型性」. 松本曜(編)『移動表現の類型論』 337-353. くろしお出版. 査読無
- 8. <u>古賀裕章</u> 2017.「日英独露語の自律移動表現:対訳コーパスを用いた比較研究」松本曜(編) 『移動表現の類型論』.303-336. くろしお出版. 査読無
- 9. 松本曜 2017.「移動表現の類型に関する課題」松本曜(編)『移動表現の類型論』1-24. 査読無
- 10. <u>松本曜</u> 2017. 「英語における移動事象表現のタイプと経路表現」 松本曜(編) 『移動表現の類型論』 25-38. 査読無
- 11. <u>松本曜</u> 2017. 「日本語における移動事象表現のタイプと経路の表現」松本曜(編) 『移動表現の類型論』 247-274. 査読無
- 12. <u>河内一博</u>. 2017. 「シダーマ語の空間移動の経路の表現」 松本曜(編) 『移動表現の類型論』97-115. 査読無
- 14. <u>守田貴弘</u>、石橋美由紀.2017. 「日本語とフランス語の移動表現:話し言葉と書き言葉の テクストからの考察」松本曜(編)『移動表現の類型論』275-302. 査読無
- 15. 高橋清子.2017. 「タイ語の移動表現」松本曜(編)『移動表現の類型論』129-158. 査読無
- 16. 今里典子. 2017. 「日本手話の移動表現」『神戸市立工業高等専門学校研究紀要』 55: 63-68
- 17. <u>吉成祐子,江口清子</u>, 眞野美穂 2016.「イタリア語およびハンガリー語を母語とする日本語学習者の移動表現類型論からみた母語の影響」『ヨーロッパ日本語教育 報告・発表論文集』13: 249-253. 査読有
- 18. <u>古賀裕章</u>. 2016. 「自律移動表現の日英比較—類型論的視点から」『日英対照 文法と語彙 への統合的アプローチ—生成文法・認知言語学と日本語学—』 開拓社 219-245. 査読無
- 19. 夏海燕. 2016. 「"走"和"去"的語義分析」『神奈川大学人文学研究所所報』56:35-42. 查読無
- 20. <u>吉成祐子</u>・眞野美穂・江口清子・<u>松本曜</u>. 2016. 第二言語における移動事象の言語化:日本語母語話者が用いる英語とハンガリー語の研究 Studies in Language Sciences (Journal of the Japanese Society for Language Sciences) 15: 142-174. 査読有
- 21. <u>Yoshinari, Yuko</u>. 2016. Influence of L1 English on the descriptions of motion events in L2 Japanese with focus on deictic expressions. Kaori Kabata & Kiyoko Toratani (Eds.), *Cognitive-functional approaches to the study of Japanese as a second language*. 275-300. Mouton de Gruyter. 10.1515/9781614515029-013. 查読有
- 22. <u>Imazato, Noriko</u>. 2016. Japanese Sign Syntax. Masahiko Minami (Eds.), Masahiko Minami (ed.), *Handbook of Japanese Applied Linguistics*, 483-510. Berlin: Mouton de Gruyter. 查読有
- 23. <u>Kawachi, Kazuhiro</u>. 2016. Introduction: An overview of event integration patterns in African languages. *Asian and African Languages and Linguistics* 10: 1-36. 查読有
- 24. <u>Kawachi, Kazuhiro</u>. 2016. Event integration patterns in Kupsapiny. *Asian and African Languages and Linguistics*, 10: 37-91. 查読有
- 25. Morita, Takahiro. 2016. Event Segmentation in French Motion and Caused Motion Events. Papers from the 16th National Conference of the Japanese Cognitive Linguistics Association 16: 115-127. 查読無
- 26. <u>Yoshinari, Yuko</u>. 2015. Describing motion events in Japanese L2 acquisition: How to express deictic information. Iraide Ibarretxe-Antuñano & Alberto Hijazo Gascón (Eds.), *New horizons in the study of motion: Bringing together applied and theoretical perspectives*. 32-63. Newcastle: Cambridge Scholars Publishing. 查読有

- Matsumoto, Yo. 2019. Path: Path coding across languages. Motion Event Descriptions across Languages. NINJAL. 2019/1/26-27
- 2. Badema, and <u>Matsumoto, Yo.</u> 2019. Khorchin Mongolian. Motion Event Descriptions across Languages. NINJAL. 2019/1/26-27
- 3. <u>Matsumoto, Yo</u> and <u>Xia Haiyan</u>. The interactional nature of deictic verbs in Japanese and Chinese. Motion Event Descriptions across Languages. NINJAL. 2019/1/26-27
- 4. <u>Kawachi, Kazuhiro</u>. 2019. Motion event descriptions in Sidaama: Forms expressing different path types. Motion Event Descriptions across Languages. NINJAL. 2019/1/26-27
- Yoshinari, Yuko. Motion event descriptions in Italian. Motion Event Descriptions across Languages. NINJAL. 2019/1/26-27
- Morita, Takahiro. 2019. Motion event descriptions in French: A typical verb-framed language? Motion Event Descriptions across Languages. NINJAL. 2019/1/26-27
- 7. <u>Morita, Takahiro</u>. 2019. Cross-linguistic constructional variations in the expression of manner of motion. Motion Event Descriptions across Languages. NINJAL. 2019/1/26-27
- 8. <u>Matsumoto, Yo.</u> 2019. Vision: Path in Visual motion across languages. Motion Event Descriptions across Languages. NINJAL. 2019/1/26-27
- 9. Mano, Miho, and <u>Yo Matsumoto</u>. 2019. Causation: Typological variety of caused motion event descriptions. Motion Event Descriptions across Languages. NINJAL. 2019/1/26-27
- 10. <u>Kawachi, Kazuhiro</u>. 2019. Motion event descriptions in Kupsapiny: Factors in the use of deictic verbs and suffixes. Motion Event Descriptions across Languages. NINJAL. 2019/1/26-27
- 11. <u>Takahashi, Kiyoko</u>. 2019. Thai motion event descriptions: Results of Experiment A. Motion Event Descriptions across Languages. NINJAL. 2019/1/26-27
- 12. <u>長屋尚典</u>, 天野友亜, 榎本恵実, 大久保圭夏, 鈴木唯, 髙橋梓, 高橋舜, 田中克典, 谷川みずき, 福原百那, 山田あかり. 2019. 「経路の種類と経路表示 —東京外国語大学における通言語的実験の成果」 Prosody & Grammar Festa 3. NINJAL.
- 13. <u>夏海燕</u> 2018 「"MV + PV + L + 来/去" 构式的考察」 Seminar of Linguistic typology and the Expressions of Motion Events in Languages in China.
- 14. <u>守田貴弘</u>. 2018. 「フランス語移動表現における経路表示と類型論」 日本言語学会第 157 回大会ワークショップ「移動経路の種類とそのコード化:通言語的ビデオ実験による移動表現の類型論再考」
- 15. <u>河内一博</u>. 2018. 「クプサビニィ語とシダーマ語における通言語的傾向と類型タイプの現れ」 日本言語学会第 157 回大会ワークショップ「移動経路の種類とそのコード化:通言語的ビデオ実験による移動表現の類型論再考」
- 16. <u>高橋清子</u>. 2018. タイ語移動表現の経路表示 日本言語学会第 157 回大会ワークショップ 移動経路の種類とそのコード化:通言語的ビデオ実験による移動表現の類型論再考」
- 17. <u>長屋尚典</u>. 2018. タガログ語移動表現の経路表示 日本言語学会第 157 回大会ワークショップ「移動経路の種類とそのコード化:通言語的ビデオ実験による移動表現の類型論再考」
- 18. <u>Matsumoto, Yo, Monica Kahumburu.</u> 2019. Motion event descriptions in Kiswahili: Pattern of variations in Path-coding positions. Linguistic Society of America 2018 Annual Meeting
- 19. <u>Morita, Takahiro</u>. 2017. Deixis and semantics of Construal: An experimental study in Japanese and French. The 14th International Cognitive Linguistics Conference, University of Tartu.
- Yoshinari, Yuko, Fabiana Andreani, and Miho Mano. 2017. Reconsideration of path salience in motion events: Coding patterns of multiple paths in Italian, Japanese and English. The 14th International Cognitive Linguistics Conference, University of Tartu.
- Mano, Miho, and <u>Yuko Yoshinari</u>. 2017. Paths to second language acquisition: Motion event descriptions in L1 and L2 English and Japanese. The 14th International Cognitive Linguistics Conference, University of Tartu.
- Matsumoto, Yo; Xia Haiyan. 2017. Visibility and purpose as submeanings coded in deictic verbs: A comparison of English, Japanese, and Chinese. The 14th International Cognitive Linguistics Conference, University of Tartu. 2017/07/10-14.
- 23. <u>Takahashi, Kiyoko</u>. 2017. On the correlation of formal unity and conceptual coherence of complex event: A case study of Mandarin Chinese and Thai caused motion expressions. The 14th International Cognitive Linguistics Conference, University of Tartu. 2017/07/10-14.

- 24. <u>Morita, Takahiro</u>. 2017. Deixis and Semantics of Construal: An experimental study in Japanese and French. The 14th International Cognitive Linguistics Conference, University of Tartu.
- 25. Miho Mano, <u>Yuko Yoshinari</u>, Kiyoko Eguchi. 2017. A bidirectional study on motion descriptions of English and Japanese L1 and L2 speakers: Focusing on the influence of deictic expressions in L1 and the learner language properties. British Association for Applied Linguistics (BAAL) 2017
- 26. 江口清子, <u>吉成祐子</u>, 眞野美穂, アンナ・ボルジロフスカヤ, <u>松本曜</u>. 2017. 「移動表現における着点の有無:通言語的実験研究」 日本言語学会第 155 回大会
- 27. Morita, Takahiro. 2017. How to integrate the concept of "speaker" into the motion typology? From "representation of physical events" to "linguistic reconstruction of perceived events." NAMED Workshop Neglected Aspects of Motion-Event Description, ENS, Paris, 2017/05/19-20.
- Matsumoto, Yo; Kimi Akita, Anna Bordilovskaya, Kiyoko Eguchi, Hiroaki Koga, Miho Mano, Ikuko Matsuse, Takahiro Morita, Kiyoko Takahashi, Ryosuke Takahashi, Yoshinari, Yuko. 2017. Linguistic representations of the path of vision: A crosslinguistic experimental study. Neglected Aspects of Motion Event Descriptions ENS, Paris, 2017/05/19-20.
- 29. <u>Matsuse, Ikuko</u>. 2015. Caused-motion Expressions in Kathmandu Newar. Himalayan Languages Symposium 21.
- 30. <u>松本曜・夏海燕</u>. 2015. 「直示動詞における「話者領域」と視覚性:日中英語におけるビデオ実験による考察」日本言語学会第 151 回大会
- 31. <u>Kawachi, Kazuhir</u>o. 2015. Event integration Patterns in Kupsapiny. 8th World Congress of African Linguistics. 京都大学
- 32. Matsumoto, Yo, Kimi Akita, Kiyoko Eguchi, Monica Kahumburu, Miho Mano, <u>Takahiro Morita, Kiyoko Takahashi.</u> 2015. Clause Integration in Different Types of Caused Motion: A Crosslinguistic Experimental Study. 2015. The 13th International Cognitive Linguistics Conference, Northumbria University, Newcastle, UK
- 33. <u>Yoshinari, Yuko</u>. 2015. The choice of the construction for motion events in Italian: A comparison of Japanese and English expressions. The 13th International Cognitive Linguistics Conference, Northumbria University, Newcastle, UK
- 34. <u>Kawachi, Kazuhiro</u>, Yuko Abe, Osamu Hieda, Kyoko Koga, Junko Komori, Nobuko Yoneda, and Hiroshi Yoshino. 2015. How African languages fit in Talmy's typology of event integration. 13th International Cognitive Linguistics Conference, Northumbria University, Newcastle, UK
- 35. <u>Kawachi, Kazuhiro</u>. 2015. Do speakers select constructions depending on the naturalness of described complex motion events? 13th International Cognitive Linguistics Conference, Northumbria University, Newcastle, UK.

[図書](計1件)

松本曜 2017. 『移動表現の類型論』 くろしお出版 373 頁

〔その他〕

ホームページ等. 移動動詞に関する文献目録

http://crosslinguistic-studies.ninjal.ac.jp/verb/?page_id=292

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名:吉成 祐子 ローマ字氏名:Yuko Yoshinari 所属研究機関名:岐阜大学

部局名:日本語・日本文化教育センター

職名:准教授

研究者番号(8桁):00503898

研究分担者氏名:河内 一博 ローマ字氏名:Kazuhiro Kawachi

所属研究機関名:防衛大学校(総合教育学群、人文社会科学群、応用科学群、電気情報学群及

びシステム工学群) 部局名:総合教育学群

職名:教授

研究者番号(8桁):00530891

研究分担者氏名:守田 貴弘 ローマ字氏名:Takahiro Morita 所属研究機関名:京都大学 部局名:人間・環境学研究科

職名:准教授

研究者番号(8桁):00588238

研究分担者氏名:長屋 尚典 ローマ字氏名:Naonori Nagaya 所属研究機関名:東京外国語大学 部局名:大学院総合国際学研究院

職名:准教授

研究者番号(8桁):20625727

研究分担者氏名:古賀 裕章 ローマ字氏名:Hiroaki Koga 所属研究機関名:慶應義塾大学

部局名:法学部(日吉)

職名:講師

研究者番号(8桁):40597241

研究分担者氏名:高橋 清子 ローマ字氏名:Kiyoko Takahashi 所属研究機関名:神田外語大学

部局名:外国語学部

職名:教授

研究者番号(8桁):50364922

研究分担者氏名:夏 海燕 ローマ字氏名: Haiyan Xia 所属研究機関名:神奈川大学

部局名:外国語学部

職名:助教

研究者番号(8桁):80727933

研究分担者氏名:今里 典子 ローマ字氏名:Noriko Imazato

所属研究機関名:神戸市立工業高等専門学校

部局名:その他部局等

職名:教授

研究者番号(8桁):90259903

(2)研究協力者

研究協力者氏名:バドマローマ字氏名:Badema

研究協力者氏名:モニカ・カフンブルローマ字氏名: Monica Kahumburu

研究協力者氏名: イライデ・イバレッチェアンチュニャーノ

ローマ字氏名: Iraide Ibarretxe-Antuñano

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。